

いつもお世話になっております。

今月分の請求書を送付いたしますので、何卒ご査収の程よろしくお願い申し上げます。

いつもありがとうございます。

秋はあっという間に過ぎ去ってしまい、早々と冬がやってきて、真冬並みの寒さです！

みなさまは、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。

しばらく前に、NHKで葛飾北斎の娘「応為」のドラマを放送していました。応為は「江戸のレンブラント」とも称されます。それまでの日本には、西洋画のような印影、光と影を表現する画家はいなかったのだそうです。天才の父を支えつつ、自らの描く絵と向き合い、妥協しない女性絵師の成長を描いたお話でした。

その他にも、北斎を特集したテレビ番組が最近やけに多いと思っていたところ、あべのハルカス美術館で北斎展がはじまりました。絶対に間違いなく猛烈に混んでいるので、行くつもりは全然なかったのですが、友人が「すごくよかった。今回は大英博物館の協力で力が入っているし、めちゃくちゃ混んでいるけれど、ぜひ行くべき。」と絶賛しており、応為の作品も出展しているとのことなので、行くことにしました。

会社帰りに大急ぎで美術館にむかいましたが、平日とはいえ会期終了間近ということもありフロアは予想以上に混雑していました。配布している整理券で入場できるのは一時間後の19:30から。ようやく入場しても展示室の中はさらに大混雑で、人の背中しか見えず、空いているところから観る作戦にしました。結局、空いている場所など無いのですが、頭上より高い位置に展示された大きな作品、祭屋台天井絵「濤図」が、目に入った途端に鳥肌がたちました。す・・・凄っ・・・！！



祭屋台天井絵「濤図」

人を避けるのに四苦八苦しつつ、ひとまず全体を1周。私が入場したのは最終の時間帯だったので、再び入り口まで戻ると人垣も薄くなっていました。「8時30分に閉館します。」と、無情なアナウンスが流れるなか、隙間を見つけては行ったり来たりしながら鑑賞しました。

お馴染みの富嶽三十六景などの版画シリーズはもちろん素晴らしいのですが、晩年の肉筆画はものすごい迫力です。80歳後半になっても気迫は衰えず、大胆さと繊細さと緻密さが絵の中に詰まっていた。これほどの絵を描くには体力だって相当使うはずです。

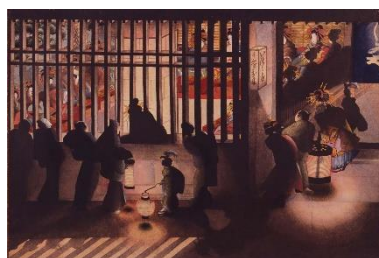
先に紹介した「濤図」をはじめ、どの作品も鬼気迫る美しさと迫力で、感動で身体が震え、訳の分からない涙まで出ていました。亡くなった年に描かれた「雪中虎図」は、テレビで何度か観たことがありましたが、実物はまるで天国を写しているかの様でした。



「雪中虎図」

世界で絶賛されるというのは、こういう事なのですね。写真やテレビで何回観ても、作品が持つ「凄み」は伝わらず、本物を生で観て体感しなければ解らないのだと実感しました。

当初の目的だった応為の「吉原格子先之図」は、吉原の人々の様子が細かく描写され、夢と現実のはざまにいる様な不思議な雰囲気を持つ、繊細ですばらしい作品でした。



葛飾応為  
「吉原格子先之図」

こんなにすごい展示がたった1ヶ月ほどで終わってしまうなんて・・・。全国を巡回して多くの人に観てもらいたいようなすばらしい展覧会でした。

師走が目の前までやってきました。ますますお忙しいかと存じますが、風邪などひかれません様、暖かくしてお身体を大事になさってください。